

日本人 EFL 学習者の聞き間違い¹⁾

高橋 栄 作

Listening Errors among Japanese EFL learners

Eisaku TAKAHASHI

Abstract

They say “Get used to it!” when you study English pronunciations. If at first you do not succeed, try, try again. I argue that you should learn a technique to acquire English pronunciations. Japanese EFL learners do not have the same phonetic systems as English native speakers. I looked at a schwa [ə], a flapped consonant and nasal [n], comparing them with Japanese pronunciations. My proposal is that Japanese EFL learners cannot hear these phones if they do not master them, and that Japanese EFL learners should first acquire a functional English phonetic system.

Keywords

Japanese EFL learner 日本人 EFL 学習者 schwa あいまい母音 stress 強勢 voiced sound 有声音 voiceless sound 無声音

1. はじめに

英語は何とか読めたり書けたりするが、聞いたり話したりするのは苦手だ、という人は少くない。どんな学習も「習うより慣れろ!!」と言われ、英語のリスニング学習は、特にそのように言われる。では、英語をただ浴びるように聞いていればよいのであろうか？私は「慣れ方」は「習う」べきであると提案する。日本人 EFL 学習者が英語を聞き間違えるということは、日本語と英語の間に音に関しての相違点があるからである。日本語と英語は実際、系統的なつながりもなければ、音声現象の聞こえ方にも開きがある。音韻構造という音韻論的尺度で比較するかぎり、異質の特徴を示す。以下、「慣れ方」をすべて網羅するわけではないが、英語学的観点（音声学・音韻論²⁾）から、英語特有の音変化を単語内での音変化に限って考察する。

II . 聞くこと・発音記号の指導について

中学校学習指導要領(平成10年12月)によると、「第2章 目標及び内容 第2節 英語 2 内容 イ 聞くことの言語活動 (イ) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取ること。」「第2章 目標及び内容 第2節 英語 3 指導計画の作成と内容の取り扱い (1) 指導計画の作成上の配慮事項 エ 音声指導に当たっては、聞くこと及び話すことを重視する観点から発音練習などを通して2の(3)の「ア音声」に示された言語材料を継続して指導すること。また、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできること。」と記載されている。

また、高等学校学習指導要領(平成11年12月)によると、「第3章 各教科にわたる指導計画の作成と内容の取り扱い 第2節 内容の取り扱いに当たっての配慮事項 (2) 音声指導の補助として、発音記号を用いて指導することができること。」とある。

自然な口調で話された発話には、英語特有の音変化が生じる。それを理解できないと内容を理解できない、あるいは内容の取り違い等が生じることになる。そして、それらの音変化の特徴を、日本人 EFL 学習者がつかむには、中学校・高等学校の指導要領に示されている発音記号を使つての指導とそれを理解できる必要があると考える。また、この音変化を解析するのが音声学・音韻論である。以下では、具体的な現象を示し、音声学・音韻論の観点から英語特有の音変化と日本人 EFL 学習者の聞き間違いを解析する。

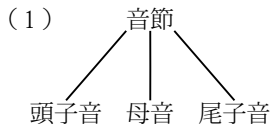
III . [eisaku] が [ɛizáku] になるのはなぜか？

私が、大学学部のコミュニケーションの授業でアメリカのメイン州にある University of Maine で講義を受けたときのことである。University of Maine の教官³⁾が、どうしても私の名前を発音できない。「エイサク」と発音してもらいたいのに、私の耳には「アイザク」と聞こえてしまう。これはなぜであろうか？ はじめにこの現象を音声学・音韻論的に解析する。

1. 日本語と英語の違い

20世紀前半に Trubetzkoy というプラーク学派の中心人物がさまざまな言語の観察から、人間の言語を「音節言語」と「モーラ言語」に大別した。前者は音節 (syllable) を基本的韻律単位とする言語であり、後者は音節より小さな単位であるモーラ (mora) を基本的単位とする言語である。英語は、前者に、日本語は後者に分類されている。人間の音声は一つ一つの音がただ連続したものではなく、いくつかの音の一つのまとまりを作っている。母音を子音が取り巻く形で作られるのが音節 (syllable) という単位である。母音の前にくる子音を頭子音 (onset)、後ろにくる子音を尾子音

(coda) と呼ぶ。



分節音の連続が母音を中心として音節という単位にまとまるということは、音声産出の面からもきわめて自然なことである。多くの言語では、この単位が音韻現象を記述する基本単位となっている。英語を例にとると、one、two、three という語は一音節、seven、thirteen、は二音節というように音節は英語話者が単純に語の長さを数えるときの単位である。一方モーラとは、「弘前」なら [hi] [ro] [sa] [ki] がそれぞれ音節となり、この音節の単位をモーラという。

2. 開音節言語と閉音節言語

日本語と英語は音節構造についても顕著な違いを示す。先に述べたように、音節は母音の周りに子音が結合した単位であるが母音の後ろに子音が続くかどうかにより開音節 (open syllable) と閉音節 (closed syllable) の二種類に別けられる。開音節とは母音で終わる音節であり、閉音節とは子音で終わる音節である。別の言い方をすると前者は coda を持たない音節で後者は coda を持つ音節ということになる。日本語は (子音 + 母音) を音節の基本構造とし、逆に英語は閉音節を好む⁴⁾。以下に例を示す。

(2) 日本語の音節構造

開音節：ka.mi (髪)、ku.tu (靴)、tu.ku.e (机)

閉音節：ka.ba.n (かばん)、hon (本)、fu.to.n (布団)

英語の音節構造

開音節：bee, comma, toe

閉音節：short, boot, voice

3. ピッチアクセント言語とストレスアクセント言語

日本語と英語は語アクセントの点でも異なるタイプに分類される。語アクセントとは語を単位として与えられる音韻特徴であり語の内部の特定の部分を際立たせることにより語としてのまとまりをつけようとするものである。日本語と英語は語アクセントを有するという特徴は共有している。語アクセントを有する音韻特徴を持つ言語は、その特徴がどのように実現するかによりさらに、ピッチアクセント言語とストレスアクセント言語の二種類に分類される。前者は語の際立ちを高低の変

化によって表そうとする言語で、後者は主に強さの変化によって表す言語である。日本語は前者に、英語は後者に分類される。

(3) 柿 - 牡蠣 橋 - 端 SUBject-subJECT IMPact-impACT

英語ではこの区別に音の高低の変化だけでなく強さや長さも大きく関与しており、アクセントのある音節の母音が、アクセントの無い音節の母音より強く長く発音される。また、強弱という強さの違いや、長短という長さの違いは、母音の音色にも大きく影響し、アクセントの無い音節では、母音の音色が不明瞭となり、あいまい母音を作り出す。

4. 英語ではアクセントの無い母音はあいまい母音 (schwa [ə]) になる。

先に見たように英語は強弱によるアクセントがはっきりしている。一方、日本語は強弱ではなく高低でアクセントをつける。英語の場合 progress は、名詞ならば pro の部分にアクセントがあり [prágrəs] 動詞ならば gress の部分にアクセントあり [prəgrés] となり語頭の部分の音が変化する。アクセントがないため、[ɑ] → [ə] に変化した。Halle and Keyser (1971) によればこのプロセスは次のように規則化されている。

(4) -stress

-long → [ə]

V

この規則の意味するところは、強勢のない [-stress]⁵⁾ 短い短母音 [-long] 母音 (vowel、以下 V) は、あいまい母音の [ə] として音声的に現れるという事である。野中 (2002) によると、このあいまい母音は、発音上も聞き取り上も日本人が最も苦手とする音だという。また、Giegerich (1992) によれば、無強勢音節においては、この音が最も頻度があるとしている。

たとえば、enough という単語の発音を見ると、多くの日本人 EFL 学習者は [inʌf] 「イナフ」と発音するが [i] 「イ」にアクセントはないので [i] 「イ」ではなく schwa [ə] になり [ənʌf] となる。以下の例の下線の V も同じく schwa [ə] となる。

(5) announcement [ənʌnsmənt] today [tədeɪ] impossible [impəsəbl]

5. つづり字 S は無声音 [s] のときもあれば、有声音の [z] のときもある。

音声学・音韻論的には、摩擦音⁶⁾ [s] - [z] は、[-sonorant] (非共鳴性⁷⁾) [+continuant] (継続性⁸⁾) の素性を持つ。つづり字 S が [s] になったり [z] になったりするのはある程度判断できる。

(6) [s] のとき

mississippi, missss, boss, toss, pass など

[z] のとき

visit, invasion, television, advisior など

上の例からある規則性がわかる。無声音の [s] が有声音に挟まれたとき、その有声音に影響されて有声化し [z] になる。摩擦音の無声音は有声音に挟まれた環境では有声化する。

(7) [-voice] (無声音) → [+voice] (有声音)

これに似た現象は、日本語にもある。

(8) neko + sita → nekozita

koban + same → kobanzame

take + sao → takezao Tsujimura (1996) 窪菌 (1995, 1999)

これは、連濁といわれる現象で複合語の後部要素の onset が V に挟まれて有声化している。しかし、この現象には kutu + sita → *kutuzita のような例外もあり必ずしも起こらない。

以上の点と、英語と日本語の相違点等を考慮して [eisaku] が [ɛizáku] になるのはなぜか考察すると、まず摩擦音 [s] が [z] になるのは周りの有声音に影響されて有声化したことになる。[e] が [ɛ] になるのは強勢が影響している。強勢がおかれていないので弱化して [ɛ] になった。よって、私の耳には「アイザク」と聞こえてしまった。以下、単語内での音変化に限り考察を続ける。

(9) [eisaku] → [ɛizaku] [s] の有声音化

[ɛizáku] → [ɛizáku] あいまい母音化 [ɛ]

IV. Flapped consonant

野中 (2002) によれば、下記の発音は日本人 EFL 学習者には同じ音に聞こえてしまう。

- (10) writer [raɪtər] ライラー
 rider [raɪdər] ライラー

これには、フラップ (弾音⁶⁾) [t] という音が関与している。窪菌 (1998) によると、[t] 音が強勢に続き、かつ無強勢母音に先行する場合有声化する⁹⁾。

島岡 (1986) によれば [t] と [d] は舌先が歯茎について発音されるが、日本語のタ行とダ行の [t] と [d] は舌先が歯茎よりも前に出ているばかりでなく前舌が歯茎につくことが多く、英語らしく [t] と [d] を発音するには舌をそりぎみにして、いわば舌の帆を張るつもりで発音すると歯切れのよい [t] と [d] が発音できるとする。音声学・音韻論的には [t] と [d] は、[-sonorant] (非共鳴性) [-continuant] (非継続性) の素性を持つとし、共に調音点は歯茎で閉鎖音であり、無声音か有声音かの違いをもち [t] の音は多くの異音¹⁰⁾ を持つとする。

窪菌 (1998) によれば、日本語のラ行音は、舌先が歯茎に一瞬だけ接してすぐに離れる形で作られるとし、閉鎖音よりも接触時間が短く、[d] の音と混同されやすいため子供の発音でダ行音との混同が起こり、また英語の [d] は、日本人 EFL 学習者にはラ行音のように聞こえるとする。

- (11) まだなの → まらなの

better [bétər] を例に考察すると、[t] の前には [ɛ]、後ろには [ə] の母音がある。強勢は [bé] にくるので [t] の後ろの母音には強勢が無いことになる。よって [t] はフラップ [t] になり、「ベター」ではなくて「ベダー」あるいは「ベラー」に聞こえる。同じように writer [raɪtər] という単語も [t] の前には [ái] 後ろには [ər] とそれぞれ母音があり、後ろの母音には強勢がないのでフラップ [t] となる。その結果「ライラー」のような音に聞こえる。同じ音声環境では [d] もフラップとなり [t] か [d] か 区別がつかなくなる。しかしこの現象は休止があるとその影響を受けなくなる。

- (12) later [lé·ita] 桑原他 (1985)
 e.g. water, bottle, letter, ladder, Yamada, Okamoto, Toyoda

V. つぎにくる子音を消してしまう [n]

野中 (2002)、島岡 (1986) によるとつぎにくる子音を消してしまう [n] というのがあるという。

center が「センナー」のように聞こえるという。まずIVで述べたように [t] は変化しやすいことに注目する。この変化は一定の音声環境によって生じる変化なので、どの環境でどの変化が生じるかを確認する必要がある。つぎにくる子音を消してしまう [n] の現象を解析するために、二つの規則を提示する。Giegerich (1992) によれば以下のように規則化される。

(13) $V \rightarrow [+nasal]$ before [+nasal] [n] は先行する母音を鼻音化する。

さらに、次の規則を加える。

(14) [n] の直後の子音は発音されないことがある。

音を鼻から出すときは「鼻腔への弁」が下がり鼻に通じる道を開ける。[n] はこの鼻から音を出す音である。[n] を作るために下がった部分が元の位置に戻りきらないうちに次の音を口から出そうとすると、鼻から空気が抜けて本来の音になりそこなう。そのため [n] の直後の子音はその影響を受けて発音されないことがあるように聞こえるのである。

(15) international, center, twenty, dental, Atlanta, identity, internet

VI. まとめ

音変化というものは、英語だけを話す環境に何年も暮らすことができれば、自然と身につくものであるが、英語を話す必要のない日本にいながらにして身につけるのはとても難しいことである。英語の話し言葉でどういった音変化が起こるのか、そして日本人 EFL 学習にはどのように聞こえるのかを正しく知り、「苦手」を克服できれば、英語によるコミュニケーションを円滑に図るうえで重要な聞く力の向上が図れるであろう。音変化の現象を知ることにより、音変化の現象をある程度予測することが可能になる。よって、音の文法を知ることが必要であると主張する。

(たかはし えいさく・高崎経済大学地域政策学部非常勤講師)

Notes

- 1 本論文は上越教育大学、実践場面分析演習での口頭発表に加筆・修正を施したものである。
- 2 音韻論をはじめとする英語学という学問は必ずしも英語教育への貢献を目的としたものではなく、「英語という言語がどのような体系、構造をなしているか？」という問題を解明しようという学問である。
- 3 Maine University の教官は日本語を理解できない。
- 4 日本語では閉音節が嫌われるため、子音が連続する場合、尾子音の後ろに母音を挿入しようとする。
 kiss /kis/ → /kisu/
 milk /milk/ → /miruku/
 英語の歌を歌って字余りになるのはこのような母音挿入による。
- 5 [] はさまざまな言語的要素の属性を現す。
- 6 英語・日本語の子音体系
 英語の子音体系

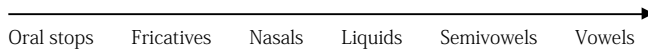
調音法	調音点						
	両唇	唇歯	歯間	歯茎	硬口蓋 歯茎	軟口蓋	声門
閉鎖音 無声 有声	p b			t d		k g	
破擦音 無声 有声					tʃ dʒ		
摩擦音 無声 有声		f v	θ ð	s z	ʃ ʒ		h
鼻音	m			n		ŋ	
側音				l			
半母音	w			r	j	(w)	

日本語の子音体系

調音法	調音点				
	両唇	歯 歯茎	硬口蓋 歯茎	軟口蓋	声門
閉鎖音 無声 有声	p b	t d		k g	
摩擦音 無声 有声		s z			h
鼻音	m	n			
弾音		r			
半母音	w		j	(w)	

窪園 (1998)

- 7 Sonority (聞こえ度) : 言語音がより遠くまで聞こえる音は聞こえ度がより大きいと言われる。有声音は無声音より、母音は子音より、摩擦音は閉鎖音より聞こえ度が大きい。
 下記参考 (右へ行くほど大きくなる。)



また、聞こえ度の大きい母音の周りに聞こえ度の小さい子音が結合し音節を作り出す。母音子音が無秩序に連結している訳ではない。

- 8 Continuant (継続性): Chomsky & Halle (1968) が提唱した、ある音素を別の音素と区別するために必要な音声的特徴を示す素性の一つで、音の流れを遮断されずに調音される音を [+continuant] その逆を [-continuant] という。
 たとえば、 [+continuant]: rye, lie, you, woo, zoo
 [-continuant]: tea, key, buy, my, guy Giegerich (1992)
- 9 有声化するとは /d/ に近くなるということ。
- 10 環境の違いにおける音声的相違

References

- Chowsky, N. & M. Halle (1968), *The Sound Pattern of English*. Harper & Row.
Halle, M. & S. J. Keyser (1971), *English Stress*. Harper & Row.
Heinz J. Giegerich (1992), *English Phonology: An Introduction* : Cambridge University Press
Hammond, M. (1999), *The Phonology of English*: Oxford Press
原口 庄輔 他 (2000), 『ことばの仕組みを探る』 研究社
窪園 春夫 (1991), 『英語の発音と英詩の韻律』 英潮社
窪園 春夫 (1995), 『語形成と音韻構造』 くろしお出版
窪園 春夫 (1998), 『音声学・音韻論』 くろしお出版
窪園 春夫 (1999), 『日本語の音声』 岩波書店
桑原 輝夫 他 (1985), 『音韻論』 研究社
文部省 . (1999), 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』 開隆堂出版株式会社
文部省 . (1999), 『中学校学習指導要領』 東京書籍
Natsuko Tsujimura (1996), *Japanese Linguistics*: Blackwell Publishers
野中 泉 (2002), 『やさしい英語のリスニング』 語研
島岡 丘 (1986), 『教室の英語音声学 Q&A』 研究社